くらふと 県育協だより

発行
鳥取県子ども家庭育み協会
広報委員会
第43号

鳥取の保育園 私たちの園

ー 第15回 くらふと広報誌からの保育園紹介 ー

幼保連携型認定こども園／社会福祉法人 鳥取福祉会

わかば台こども園

所在地：鳥取市若葉台南2丁目205−2
定　員：110 名（0～5歳児）

教育保育理念　一人一人の人権を尊重し、信頼と愛情を基調にして地域に開かれた活力ある園を目指す

教育保育テーマ　遊びきる子ども

今年度の研究テーマ　「知りたい!やりたい!こうしたい!」共主体で子どもの思いを実現する遊びの実践

自然保育認証園として、地域の豊かな自然を活かし、ヒト・モノ・コトとの出会いを大切にして、体験から遊びを広げていくことに努めています。子どもの学びは、主体的な遊びや生活を通じて生まれます。直接体験を重視し、子どもの主体性を育みながら、仲間と協同する中で遊びを通じて様々なことを学んでいます。環境構成はもちろん、子どもたちの「繰り返したり挑戦したり…遊びたい（学びたい）気持ちを保育者が受けとめ、一人一人が安心して十分に自己発揮できる場を大切にしています。また、３歳未満児クラスは少人数担当制、３歳以上児クラスはグループでの活動を大切にし、気持ちに寄り添うこと、話し合いの機会を設けること、応答的な関りを行うことに努めています。需要や共感の関わりが増えると、安心感から自分の思いを伝えたり相手の思いを聞こうとしたりする姿が見られます。子どもと保育者がともに思いを出し合い（読みとり・寄り添い）ながら遊びを創り出しています。

園を知る３つのポイント

❶自然の中で実体験（自然保育認証園）

地域の里山、園周辺・鳥取の自然の中で五感をフルに働かせて遊んでいます。里山で採れたわらびや野イチゴはご飯やジャムに変身。山道を歩くと日陰の涼しさや踏ん張って歩くことの大切さを体感。レモンライムの木には卵がつき…蝶々になるまでの成長を見ることができます。実体験は子どもの心と体を成長させる栄養素です。

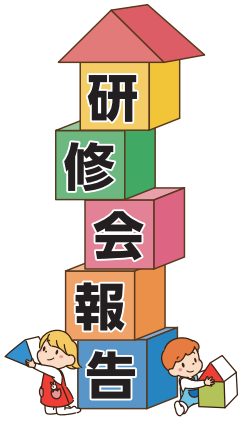
❷地域の中で育っています

地域の公民館、小学校、まちづくり協議会…等様々な方との交流で地域の良さを感じています。地域の方からたっぷりの愛情を受けて感じとったふるさと鳥取・若葉台の人の温かさやつながり、豊かな自然と自然を活用した活動…は大人になっても心の中に残っていて、大好きな鳥取を盛り上げてくれる…と期待しています。

❸何事にも全力な保育者集団

わかば台こども園の職員は一致団結、何事にも全力で取り組みます。若葉台小学校の先生と毎年夏に開催する保育体験・公開保育・保小連携研修では全力討議。保育者も主体性を発揮。それぞれの『得意』を保育に活かしながら保育を計画し夢中になって主体的に遊びます。

遊びきる子どもと遊びきる大人（保育者）は全力で遊び（学び）ます！



第69回 鳥取県保育推進研究大会

鳥取県子ども家庭育み協会
副会長　道川 由利香

令和８年１月17日（土）、エースパック未来中心において「第69回 鳥取県保育推進研究大会」が開催されました。年が明けてすぐに起こった地震や雪の影響を心配しましたが、約３４０名の皆様にご参加いただき盛大に開催することができました。

開催にさきがけ、鳥取県子ども家庭育み協会の立ち上げから多大なるご尽力を賜りました、社会福祉法人赤碕保育園理事長の福田泰雅先生のご逝去を悼み、参加者全員で黙祷をささげながら故人のご冥福をお祈りしました。

開会式では鳥取県子ども家庭育み協会　大橋和久会長の挨拶に続き、保育功労者17名の皆様の表彰が行われました。長年の功績に敬意を表したいと思います。

開会式の様子

保育功労者表彰の様子

全体会では、「デジタル・ＡＩ時代における子どもの育ち―『集団共同型子育て』の再生にむけて」をテーマに、東京大学大学院教育学研究科の教授　遠藤利彦先生をお迎えし、ご講演をいただきました。幼児期までの子どもの育ちに関わる基本的なビジョン（はじめの１００ヶ月の育ちビジョン）についてお話を聞く中で、現代背景をとらえた「集団共同型子育て」を考えたとき、保育園・こども園はとても重要な役割を担っているというお話がとても心に響きました。乳幼児の育ちには「安心」と「挑戦」の繰り返しが大切であり、安心をもたらすためのアタッチメントがとても大切であるということ、また大人だけではなく多様な関係性の中で身につけていく、非認知的な心の発達の保障が大切であるということをとらえたとき、園としての役割は何か、私たち保育士はどう子どもたちに向き合っていくのか、ということを改めて考えるとても貴重な機会となりました。

遠藤先生のとても具体的でわかりやすい熱心なお話で、90分という講演時間はあっという間に終了し、実りある時間となりました。

第1分科会に参加して

上北条保育園　日置　沙織

全体会に引き続き、講師に東京大学大学院教育学研究科　教授　遠藤利彦先生をお迎えし、「アタッチメントの視点から 子育ち・子育ての原点に立ち返る」と題し、ご講演をいただきました。

乳幼児期の育ちには、「安心」と「挑戦」の繰り返しが大切であり、安心の土台を築くアタッチメント（愛着）や、昨今よく耳にする「非認知能力」について、具体的にお話をしていただきました。アタッチメントとは、単なる抱っこをするスキンシップ（皮膚接触）ではなく、子どもが不安な時、感情が崩れた時に「大丈夫」と安心感を与え、支えることです。アタッチメントを経験できずに成長すると、自己と社会性に関わる心の力の発達が著しく遅れるという研究結果も出ています。また、それぞれの基盤となる「自己信頼」「他者信頼」の感覚が空っぽの状態で成長すると、犯罪に巻き込まれたり非行に走ったりと、人の心身の健康を脅かすことが証明されています。すなわち、子どもの一番近くにいる大人

（家庭外では保育者）との安定したアタッチメントが、心の土台を形成する上で最も重要な役割を果たしているというお話でした。

かつて、教育というのは、義務教育が重要だという考え方が一般的でしたが、今では乳幼児期に教育の重きを移しかえています。認知能力を身に付けるだけではない、生涯の最初に身に付けておくべき心の土台である「非認知能力」が、決定的に重要な役割を果たすと言われており、世界中の保育のキーワードになっています。乳幼児期の限られた時間は、人生の他の時間とは異なり、無条件に愛される時間が過ごせるよう、親に限らず、私たち保育者が「安全な避難場所」「安心の基地」となっていくことが大切だと再認識しました。

最後に、アタッチメントは乳幼児期のみならず、子どもが成長していく過程や大人にとっても、崩れた感情を立て直すために重要なものであるというお話をされました。安心感の確保や維持することは、生涯にわたる心身の健康に繋がります。子どもたちの成長において、自分の役割が大きな責務だというプレッシャーを感じながらも、この大切な時期に携わることができることを誇りに思い、保育をしていきたいと思いました。

講師の遠藤利彦先生

第2分科会に参加して

かいけわかば園　河合　光枝

第2分科会として、一般社団法人保育の寺子屋代表理事の藤實智子氏をお迎えし、「子どもの命を守る、安心安全な園であり続けるために」と題して、ご講演をいただきました。今回の講演内容は事前に決まっていたものでしたが、講演数日前に震度5強の地震が県内西部で起き、そして保育中の出来事であったことから、日々の課題や反省を各自がいつも以上に持ち寄った参加となっていたように感じました。

冒頭、「災害発生時、子どもたちを守るためには、まずは保育者である自分自身の身を守ることが大切であり、自分が犠牲になってしまっては多くの子どもたちを守ることはできません。」と言われました。保育者として危険を前にした子どもがいれば身を挺してでも守らなければと考えますが、改めて、災害発生時の基本中の基本として心に留めておかなければならないと感じました。そして、もしもの災害から大切な命を守るために、「もしもの先」を考える想定力が大切であり、日常の訓練（実践）こそが最も重要であると言われました。また、いつも同じ訓練をしていませんか?との問いかけがありました。小学生の子どもたちが校庭にいた際に地震が起き、子どもたちは急いで校舎に戻り教室の机の下に入ったとのこと。子どもたちは教えられたことを実践したというわけです。避難訓練のポイントとして、想定は細かく具体的にし、全職員に周知したうえで行い、想定を変えて様々な避難訓練を実践していくこと。そして、課題が残る訓練にし、一人ひとりが自分の意志で行動できるようにすること。かけがえのない命を守るには選択肢を多く持ち、想定外に対応できるようにしておくこと等、沢山の教えをいただきました。【備えとは、危機に対応できる知識と判断力を育むこと。】園の子どもたちが、就学後に自分で自分の命を守ることができるように育てることが、保育者である私たちの役割であることも、再認識できた講演でした。今回得た学びを園に持ち帰り、私たち保育者にできる最大限のことを実行し、子どもたちの笑顔を守っていきたいと強く思いました。

講師の藤實智子氏

第3分科会に参加して

わたり保育園　岡﨑　寿子

第３分科会は「子どもが食に親しむための食育活動～実践から学ぶ新しい工夫～」と題し、鳥取短期大学生活学科食物栄養専攻 助教 石賀安枝先生にご講演いただきました。

石賀先生が話されたように、食育活動に関しては、保育指針や食育基本法ともに具体的な明記がないため、保育園での活動はこれで良いのか迷いながらも各園で工夫しているところです。しかし同じ内容になりがちでマンネリ化を感じていました。

今回の石賀先生の講演の中で、食育活動をするにあたっては、目的を明確にすることでマンネリにはならないと述べられました。その例として、年中行事をあげられました。餅つきや豆まきなど、子ども時代に体験すると、大人になったときに子どもに伝える、つまり「伝承」するという目的が明確であり、同じことを繰り返していてもマンネリとは言わない、食育活動も新しくする必要はなく、今までの内容を見直し、強化することが大切であると述べられました。

食育活動をするにあたっては、目的を定め楽しむことに加え、学びがあるかどうかが重要になってきます。具体的な実践例として子どもたちがご飯を炊く様子が紹介されました。実際に鍋でご飯を炊くことで五感をフルに使い、この食材が食べられるかを見分ける・見抜く力と生きる力を育てるそうです。そして栄養教育として、フードバースマップを紹介されました。マップを活用することで、給食で食べた食材はどこでできているか考えるようになるそうです。栄養教育は必要であること、食の体験の先に何があるか、何を食べると元気になるか、季節の野菜の話を交えながら伝える大切さを述べられました。苦手な野菜があっても好きな野菜と同じ畑からできていると知ると、食べられるきっかけになるなど、シンプルでも食育になる、その場だけが楽しいのではなく、それがどこに活かされるかが大切であると学びました。

今までの活動をマンネリとせず、目的を明確にして食育の役割をしっかりと考え、今後の食育活動に活かしていきたいと思います。

第4分科会「対話鑑賞」～本物との出会い～

夜見保育園　松本　拓巳

「対話鑑賞」～本物との出会い～と題し、鳥取県立美術館に設置されたアートを通じた学びにまつわる研究室「アート・ラーニング・ラボ（A.L.L.）」の取り組みの中で保育に活かせる視点を学びました。

第４分科会では、実際に「対話鑑賞」を体験しました。美術館に展示されている一つの作品を題材に、鑑賞しながら語り合いました。美術館で立ち止まって作品を見る時間は平均８秒とも言われる中、今回は15分間一つの作品を見つめ続けたことで、「こんな小さな部分まで描かれていた」「角度によって印象が変わる」「作者はどのような意図で描いたのだろう」といった気づきが生まれ、互いの視点に触れながら鑑賞の面白さが広がっていくことを実感しました。講師からは「正解がないからこそ意見が分かれても、自分なりの考

えが深まり、気持ちのよい意見交換の場になる」とのお話もありました。

対話鑑賞後は小グループで振り返りを行った後、全体発表へとつなげました。話し合いでは、「子どもの表現を大人の物差しで決めつけていないか」「製作が作業になっていないか」など、日々の関わりを見直す意見が出ました。また講義では、美術館での活動で子どもたちが壁や床に自由に絵を描くイベントがあり、一人のお絵描きが周囲の子どもたちへ自然と広がって大きな作品になる様子や、「こんなきれいな色みたことない」と一人で黙々と自分だけの色を重ねていく姿が紹介され、表現の豊かさに触れる機会となりました。

研修をとおして、アートとは一人一人の思いや感じ方を大切にしながら、自分らしく表現できるものであると改めて感じました。作品を観た人がそれぞれの思いで受け取り、そこから対話が生まれ、人と人とのつながりが広がっていくことを学びました。今後も、子どもたちの想いを表現する過程を大切にし、作品や行動に込められた思いや背景に目を向けながら、言葉を交わしていく関わりを心がけていきたいと思います。

主任保育士研修会

夕日ヶ丘保育園　山﨑 可奈子

主任保育士研修会が9月29日（月）にオンラインで開催されました。講師を和洋女子大学人文学部こども発達学科教授の矢藤誠慈郎氏にお願いし、「保育の質を高めるチームづくり」と題してご講演いただきました。2025年度から「児童福祉法」の改正や「人権教育・啓発に関する基本計画」の閣議決定等により、改めて「子どもの人権擁護の観点から望ましいと考えられる保育」をすることが基本となります。「子どもを尊重する保育」のために「保育の質」を高める組織づくりは、より重要性が高まり、様々な観点を持ちながら取り組んでいく必要があります。今回の講演では、「個や組織の観点からのヒントになる概念」や「同僚性の本質・あり方」「保育の質」の向上に向けた取り組みについて、わかりやすく示していただきました。また、「保育の質」向上の方法や「教育・人材育成」の考え方と方法についても、具体的に説明していただき、とても参考になりました。

講師の矢藤誠慈郎先生

講演の冒頭に、昨今の園における事故や虐待等の深刻な事態を保育士の人員不足や忙しさを原因にする見方もありますが、専門家としてこのようなことを原因にしてはならないと言われました。一人だとこのような思考に陥るかもしれませんが、だからこそ、チームでの日々のコミュニケーションや一人一人の小さな工夫・リフレーミング思考を高めていくことで、安心感があり信頼し合える質の高い組織を作り上げていくことが重要であると改めて感じました。

組織全体で同じ方向を向いて学び合い、進化していくために、主任としてまずは、主導的になりすぎず、一人一人が力を発揮できるような、「同僚性」を導く環境を整えていくことや、時間の工夫をしながら短時間でも職員同士で対話ができる時間を保障し継続させていく園内研修の方法等も大きな学びとなりました。

子どもも職員も様々な見方や考え方があり、正解がないからこそ、保育所保育指針の言葉を共通の言葉として用いり、日々の対話を大切にしながら、お互いを尊重し高め合っていけるようなチームづくりをこれからも心掛けていきたいと思います。

第2回障がい児保育研修会

「園全体で取り組むポジティブ行動支援」

どんぐりこども園　井勢　敬子

第2回障がい児保育研修会が、10月31日（金）から11月4日（火）まで、鳥取大学医学部附属病院新規医療研究推進センター臨床研究支援部門特命助教授 嘉手苅瑠輝先生を講師にお迎えし、オンラインにて開催されました。

講師の嘉手苅瑠輝先生

嘉手苅先生の講演では、「ポジティブ行動支援とは、望ましくない行動に注目するのではなく、子どもの望ましい行動に着目し、褒めたり認めたりするなど肯定的な働きかけを行うことが重要である」という考え方が示されました。

研究や実践に基づいた指導法、ポジティブ行動マトリクスの活用例、支援会議の進め方など、具体的で分かりやすい内容が紹介されました。

私たち保育教諭は、一人一人の子どもの特性や行動を観察・記録し、「なぜその行動が起こるのか」と分析することで理解を深め、困った行動の機能を知った上で、望ましい行動を引き出す工夫をスモールステップで進めていくことの重要性を学びました。

発達支援は療育（治療・教育）であり、園や学校、専門機関、そして家庭との連携が不可欠であることを改めて認識しました。

また、個別支援だけでなく、ルールの提示や写真・カードなどの視覚支援を用いた集団（クラス）全体への支援は、個別支援以上の効果が見られ、他の子どもたちの行動改善にもつながるという事例に大きな学びを得ました。

質疑応答では、専門機関へ出向くことが難しい場合には保育所訪問支援事業を活用すること、また、目標を明確にした上で、加配教諭が全ての場面を担うのではなく、場面ごとに他の保育教諭が対応するローテーションも有効であるとの助言をいただきました。

特性を特別なものと捉えず、大人も子どもも得意・不得意があり「みんな同じである」という視点を大切にすること、集団の中で互いを理解し尊重する力が育まれることも学びました。

「園全体でポジティブ行動支援に取り組むことで、子どもの行動改善だけでなく、職員の実践の定着にもつながる」という言葉が特に印象に残りました。

少子化が進む今、保育の質の向上がより一層求められています。将来を担う子どもたちを育てる役割として選ばれる園であり続けるためにも、園全体でポジティブ行動支援に取り組んでいきたいと考えます。

第2回施設長研修会

わたり保育園　武良　純子

11月6日（木）にエースパック未来中心にて第2回施設長研修会が開催されました。講師に広島都市学園大学 子ども教育学部 非常勤講師の田丸尚美氏を迎え、「保護者支援と園の役割」～子どもだけでなく保護者を含む家庭への援助～と題して、発達が気になる子ども・親への援助や関わり方等について、ご自身の体験や事例等を基にご講演いただきました。

講師の田丸尚美先生

多動、癇癪等がある我が子を「この子と〝いる〟ことにイラつく。可愛いって思えない」と言っていた母親が、親子教室に参加し、子どもと遊びの面白さを共有する（共感）体験をとおし、子どもの特徴や関わり方、親子の絆を確かめる気づきを得たという事例がありました。親子は、教室に通うことで生活リズムがつきます。保育者は、子どもの発達・親の子ども理解を支え、そして親同士で交流できる場を提供し、子どもの姿に応じた次の療育の橋渡しを行います。メリハリのある生活と、遊びの保障、共感体験が大切であるとのことでした。また、現状を共有したい保育者の思いは伝わらず、〝非難された〟と受け取った保護者の事例もありました。事例をとおし、改めて発達が気になる子を持つ保護者は、子どもの特徴に気づきつつも子育てを継続しなければならず、言葉の裏に様々な不安や不信を隠しているということを実感しました。今まで自分が関わった親子と重なる姿もあり、反省も踏まえ今後の保護者支援や園の役割について再確認することができました。

保育の仕事は、障がいを改善する

ことではなく、子どもの〝困り感〟を軽減すること。保護者に障がい受容や障がいについての認識を求める前に、保護者の〝育てにくさ〟に関わっていくこと。〝保護者と保育者の情報共有関係〟を踏まえた対応、ともに（子どもを）育てる関係（保護者と育ち合う関係）が大切であるということ等を念頭に、適切な支援ができるように引き続き他機関とも連携を図りながら取り組んでいきたいと思いました。

第2回乳児保育研修会

つのい子ども園　青木　マヤ

第2回乳児保育研修会が11月7日（金）から11日（火）にオンデマンドで配信されました。保育のデザイン研究所上席研究員の川辺尚子氏を講師に「豊かな遊びと安全」～安全に配慮しながら子どもが出会う環境を豊かにする～をテーマにご講義いただきました。

講義やワークをとおし、保育における「安全」と「環境」の捉え方について改めて考える機会となりました。日々の保育の中で、私たちは子どもの行動に「危ない」という言葉を使い、先回りして制限してしまう場面があります。しかし、「危ない」と制限してしまうのではなく、安全への配慮を土台に、子どもが自ら気づき、出会い、学んでいける環境を整えていくことの大切さを研修からたくさん学びました。リスクとリターン（子どもの育ち）を支えるため傍に居る保育者が子どもの姿に応じて丁寧に対応しながら必要な場面で危険な部分に配慮し個々の挑戦する気持ちを支えていく役割があるということも改めて再認識しました。

先生の「保育者が子どもと共にいて、一緒に感じ、考え、行動する」という言葉がとても心に残りました。この言葉を胸に今後も安全への配慮を大切にしながら、子どもの姿に寄り添い、一人一人の「やりたい」という気持ちを保障した環境づくりに取り組んでいきたいと思います。

第2回食育研修会

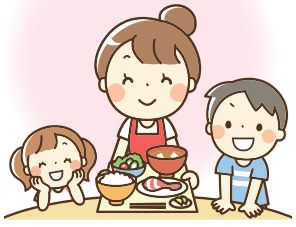
もちがせ保育園　田村　直美

第2回食育研修会が11月13日（木）から11月22日（土）までオンデマンド配信され、「偏食（好き嫌い）との向き合い方とアドバイス法」をテーマに、一般社団法人母子栄養協会母子栄養指導士・管理栄養士の茅野陽氏による動画講座を受講しました。

子どもが好き嫌いの多い理由は、食経験が浅いことから受け入れるのが難しかったり、味に敏感であるために特に苦みや酸味のあるものが苦手であったり、乳幼児期は咀嚼に個人差があり食べづらいなどということがあります。また見た目が気に入らないものや、一度も食べたことのない食材に警戒心や恐怖心を持つ子どももいます。「好き嫌いがあって当たり前」「そのうち食べるようになる」というおおらかな気持ちで見守ることや、まわりの大人がおいしく食べている姿を見せることで、自然に食べてみようかなという気持ちにしていくことが大切だと学びました。食事中の声かけについては、残っているものばかりに目がいってしまいがちですが、食べられたものを認めてあげることがとても重要だということをこの研修をとおして再認識しました。保護者へのアドバイスとしては、子どもが食べられるものから栄養をとれば大丈夫ということや、大人が期待しすぎてプレッシャーを与えないようにすること、しっかり体を動かしたり、規則正しい生活をしたりして空腹な時間を作ることなどがあげられました。

保育園では残食調査や給食会議で意見交換などを行い、献立の見直しを行ったり、味つけや調理方法を工夫するなど、子どもの「食べてみたい」を引き出すように、食環境と調理面それぞれからのアプローチを大切にしています。

今回の研修を受講し、調理員として様々な食材と触れ合ったり、食の体験を重ねる機会を作ったりして、子どもたちが自分からすすんで食べてみたいと思えるように、食育活動や日々の調理業務を行っていきたいとあらためて感じました。そして保育園だからこそできる、みんなで一緒に同じものを食べて共有する喜び



も大切にしていきたいと思います。

初任・初級保育士研修会②③

のぞみ保育園　松本　健史

研修会②を９月３日に「写真を基に子どもの姿を読み取る」をテーマにオンラインにて行いました。事前に写真を撮影してもらい「子どもが何を感じ・考え・何をしようとしていたのか」子どもの姿についてグループディスカッションをしました。「人的・物的な環境設定をしていくことで、保育が展開した様子」を発表し語り合いました。一人一人が自分で考え、楽しみ、子どもの変容があった保育ということもあり、写真を見ながら話をする参加者の顔には保育を思い出し笑顔が見られました。それぞれの保育に対する思いを語り合うことの大切さを感じた研修でした。

講師の川辺尚子先生

研修会③は12月19日に福祉人材研修センターにて行いました。研修会③では、研修会①の講師をしてくださった保育のデザイン研究所の川辺尚子先生を迎え、参加者が「子どもが豊かな経験をしている場面や、遊びこんでいる場面」の「ポスターセッション（ドキュメンテーション）」を行いました。

４人程度のグループに分かれ発表し合いました。研修会が３回目となると、参加者も顔見知りとなり、積極的に意見交換をし、時には笑い声も聞こえ、発表後には笑顔で拍手をしてたたえ合っていました。

次に、３チームに分かれてポスターセッションを行いました。一度小グループで発表していることもあり、発表する側も聞く側も積極的に保育の実践について多くの質問がやり取りされました。子どもの様子や遊びの内容等、保育について語り合うことができました。保育者同士が主体的・対話的に語り合うことの大切さや楽しさを感じることができました。

川辺先生の講評では「いつも気づくことが大切」や「育ちを共感しポジティブにキャッチしていく」こと等、お話いただきました。

１枚の写真から保育者同士が語り合い、育ちを伝え合うことで、保育の内容が深まり、より豊かな保育実践ができると感じました。

初任・初級保育士研修会③の様子

うっちー先生のえほんばなし⑮

今回のえほんばなしは、前回のえほんばなしの続きになります。年長クラスで絵本と一緒に幼年童話をたくさん読んでいきました。前回は、『いやいやえん』を読んだところで終わりました。その後、クラスがどのように楽しんでいったのか、何を楽しんだのか？をお伝えいたします。

まずはと思い、文字の少ない童話として『**ふらいぱんじいさん**』(神沢利子作 / 堀内誠一絵 あかね書房 1969 年) を読んでみたり、強弱はっきりしていたら楽しいかもしれない！？と思って『**番ねずみのヤカちゃん**』(R・ウィルバー作 / 大杜玲子絵 / 松岡享子訳 福音館書店 1992 年) を読んでみたりしました。やはり話に力があるので、「おもしろかった～」という言葉が子どもたちから出てきます。しかし、せっかくクラスで楽しんでいるというのにあまり一体感はなく、やっぱり面白い子どもだけが面白いといった感じでした。しかし、この本を読んだ時から潮目が変わりました。

絵本紹介㉗

『くまの子ウーフ』

神沢利子　作　/　井上洋介　絵　ポプラ社　1969年

クマの子どもウーフが身近で起こる様々なことに疑問を持つことから始まる9編からなる童話。自分のこと、友だちのこと、家族のこと、一見疑問を持たないようなことに疑問を感じることは、まさに哲学本と言っても過言ではありません。

この中のお話のひとつ『**ウーフはおしっこでできているか??**』のタイトルを聞くと…「おしっこ？」「おしっこって言った？」とそのワードにみんなが釘付けに。もちろん！その話は下品な話ではなく、本当に哲学的で考えさせられるような話です。それを読み終わった後にはじめて、子どもたちの中で童話についての話題が盛り上がったのです。保育者が仕掛けたわけではなく、自発的に主体的に自分の体が何でできているのかを考えてワイワイ話していました。

それからは、みんなでひとつのお話の世界へ飛んでいき、どんどん楽しむことができるようになっていきました。

ここで、子どもたちと楽しんだおすすめ童話を紹介します。

絵本紹介㉘

『オニタロウ』

こさかまみ　文 /　北村人　絵　福音館書店　2021 年

鬼の子どもオニタロウが修行に出かけ、子分を作るために孤軍奮闘。やっとみつけた里の保育園の子どもたちを子分にするべく、相撲対決を申し込む手紙を出します。鬼からの手紙を受け取った子どもたちは、恐れながらも協力して鬼に負けないために作戦を考えます。約束の日に現れたのは…弱そうな鬼の子ども。対決の結果はどうなるのでしょうか？

巻末の奥付に〔秋田県大館市の保育実践をもとに書いてある〕旨が記してありました。「あぁ子どもたちの所に鬼の手紙が届いたんだろうなぁ。きっと喜んだだろうなぁ。騒いだだろうなぁ」と想像するとうれしくなります。結末はぜひ読んでいただきたいのですが、私は…オニタロウと子どもの純粋さに泣きました。

読んでいると「先生！「子分」って何？」と聞いてくる子どもがいました。分からない言葉が出てくるのは当たり前。聞いてくれたら答えます。でも聞かなくても話の流れで分かったり、後から「そういうことか」って分かったりするのです。それが【語彙力】を高めることに繋がります。

生活の中での【傾聴力】も格段にアップしています。保育者の声、友達の声に耳を傾けます。聴こうとする姿勢が育つと生活がスムーズになります。活動の取り組みも、いろいろなことにチャレンジできます。

しかし！幼年童話本は子どもの【語彙力】【傾聴力】を高めるために読むのではないのです！！複雑な物語がわかるようになってくる５歳くらいは、まだまだ文字は読めても文章の読み取りは未熟。大人に読んでもらうことで少ない絵を楽しみ、より想像の世界を楽しんでほしい♪クラスみんなで同じ世界を旅してほしい。そう願いながら読んでいます。

年中児後半から年長児は〈読み聞かせのゴールデンエイジ〉と言われています。小学生になり、学習として文章を読むようになる前に、お話の世界の楽しさを存分に味わうことの大切さを、保育者のみなさまに再確認していただきたいです。

あーまだまだ紹介したい本とエピソードがたくさん！エルマーとボリスも、へなそうるも、パインさんも、ピーターラビットも、森のおばけ一家も…あれもこれも子どもたちの心の中で楽しく過ごしてくれているといいなぁ。

うっちー先生プロフィール　鳥取市公立園の保育士。保育士 / ジュニアスポーツ指導員 / 絵本専門士　Ameba ブログ『絵本専門士うっちー先生の活動記録』保育士・幼稚園教諭向け総合メディア『ほいく is』コラム連載

令和８年度　研修等計画

☞ 日程や場所が決まってきています！

期　日	事　業　名	場　所	備　考
４月 28 日(火)	監事会	鳥取市 福祉人材研修センター	
５月 12 日(火)	第１回理事会	鳥取市 福祉人材研修センター	
５月 20 日(水)～22 日(金)	全国私立保育研究大会	福岡県北九州市	全国私立保育連盟
５月 29 日(金)	代議員会、第１回施設長研修会	倉吉市 エースパック未来中心	
６月 ６日(土)	第１回食育研修会	倉吉市 エースパック未来中心	
７月 ２日(木)	保育士研修会	倉吉市 エースパック未来中心	
７月 ９日(木)～10 日(金)	中国地区保育研究大会	島根県松江市	中国地区保育協議会
７月 25 日(土)	第１回障がい児保育研修会	倉吉市 エースパック未来中心	
８月 28 日(金)	第１回乳児保育研修会	倉吉市 エースパック未来中心	
９月調整中	主任保育士研修会	未　定	
11 月 ５日(木)～６日(金)	日本保育協会中国・四国ブロック研修会	倉吉市 エースパック未来中心	日本保育協会 中国・四国ブロック
11 月 12 日(木)～13 日(金)	全国教育・保育研究大会	石川県金沢市	全国保育協議会 / 全国保育士会
11 月 19 日(木)～20 日(金)	保育を高める全国大会	福井県福井市	日本保育協会
11 月 20 日(金)	第２回施設長研修会	倉吉市 エースパック未来中心	
11 月未定	第２回障がい児保育研修会	WEB	
11 月未定	第２回乳児保育研修会	WEB	
11 月未定	第２回食育研修会	WEB	
１月 24 日(日)	第 70 回鳥取県保育推進研究大会	倉吉市 エースパック未来中心	
未　定	初任・初級保育士研修会	未　定	
未　定	中国地区保育協議会人材養成研修会	未　定	中国地区保育協議会
未　定	全国私立保育連盟中国・四国ブロック研修会	未　定	全国私立保育園連盟 中国・四国ブロック

＊期日及び内容等については、変更となることがありますので御了承ください。

編集後記

大きな地震で始まった2026年、皆様の園やご家庭は大丈夫でしたか？幸い大きな被害もなく通常の生活を取り戻していますが、子どもたちが安全に過ごせる幸せと責任をひしひしと感じている今日この頃です。改めて園の防災を見直し、意識を高めるきっかけとなった出来事でした。今年も子どもたちが笑顔いっぱいの一年になりますように！　（Y・M）

毎年この時期になると時のつ速さを痛感します。怒涛の如く卒園・進級・新年度の準備をして、あれもしなくちゃ、これもしなくちゃと思っているうちに気が付けば新入児を迎え、年度がかわっている…　毎年のルーティンのようですが、少しは余裕をもって過ごしたいと思う今日この頃。きっと皆さんも同じ思いのはず。仲間がいると思って頑張ります。　（O・M）

海・山・川・空・風・砂・空…鳥取は自然豊かな県です。その豊かな自然の中で五感をフルに使って感情を揺さぶりながら生活している子どもたち。その子どもたちと共にこの環境に囲まれている幸せを感じながら毎日過ごせる…保育士って素敵なお仕事だなぁ…と改めて思う今日この頃です。　（H・M）

去年の年末に、息子の所属しているラグビー部が全国大会に出場しました。全国の壁は高く、試合は大差で負けてしまいましたが、最後まで諦めない子ども達の姿に感動。仲間と共に切磋琢磨し合う日々を思うと、まさに青春の1ページ。花園の大きな舞台に立てたことは、とても貴重な経験となりました。親としてもいつも以上に応援に力が入り、本当に胸が熱くなる時間でした。　（A・I）

推しは？と聞かれたら即答で劇団四季。　地方では最新作に出会えない分、最近は日帰り観劇を満喫中。始発で飛んで夕方帰宅、翌日に疲れを残さないのが今の私流！これからも観に行けるよう、ワークライフバランスを大切にしたい。　（T・F）

先日、U―40歳のサッカーの大会に参加をし、20年ぶりに高校のチームメイトが集結しました。みんな、角が削られ体型と共に丸くなっていましたが、雰囲気は変わる事なく笑いが絶えない一日となりました。試合は、チームメイト全員がロボットの様に固く、酸素不足で交代を求め、3チーム中3位となりましたが、慰労会は、もちろん一番盛り上がっていました。楽しかった～。　（K・N）

［全私保連推奨］各種団体保険制度

有限会社ゼンポ　公益社団法人 全国私立保育連盟　東京海上日動

ほいくのほけん・こどもえんのほけん
Web加入可能
保育施設向け 4月1日～1年間（中途加入可能）

「園賠償責任保険」「園児団体傷害保険（学校契約団体傷害保険）」「職員団体傷害保険（総合生活保険）」など、保育施設における最大リスクを補償する1番の主力保険制度です。

やくいんのほけん
Web加入可能
社会福祉法人向け 8月1日～1年間（中途加入可能）

社会福祉法人の役員の業務遂行に関する賠償リスクやマスコミ対応費用等のレピュテーションリスクに加えて、雇用関連トラブルによる法人への賠償リスクもオプション付帯可能な保険制度です。

えんじのほけん
Web加入可能
在園児向け商品 4月1日～自動更新（中途加入可能）

「園内外問わず24時間お子さまをお守りする傷害保険」「扶養者に万が一の場合の育英費用補償」など手厚い補償内容に加え、一般的な保険商品と比較して約65%の割引となっているため非常に割安な保険制度です。

しょうがくせいのほけん
Web加入可能
卒園児向け商品 4月1日～自動更新（中途加入可能）

24時間のおケガ等からお守りすることに加え、学校からの貸出タブレットを含め個人賠償責任保険など卒園後のリスクを補償します。本商品も一般的な保険商品と比較して約30%の割引となっているため割安な保険制度です。

取扱代理店　有限会社ゼンポ
TEL：03-3865-3881
FAX：03-3865-2806

引受保険会社　東京海上日動火災保険株式会社
担当課支社：公務二部 文教公務室　TEL：03-3515-4134

このご案内は施設賠償責任保険・生産物賠償責任保険・学校契約団体傷害保険特約付帯傷害保険・会社役員賠償責任保険・レピュテーション費用保険（レピュテーション費用特約条項付　費用・利益保険）・雇用関連賠償責任保険の概要・団体総合生活保険（傷害保険）の概要についてご紹介したものであり、全ての事項を記載しているものではありません。保険の内容は各保険制度のパンフレットをご覧ください。また、ご加入にあたっては、必ず「重要事項説明書」をよくお読みください。詳細は契約者である公益社団法人全国私立保育連盟にお渡しする保険約款によりますが、ご不明点がありましたら、取扱代理店または保険会社までお問い合わせください。

連絡先
公益社団法人全国私立保育連盟指定／東京海上日動火災保険株式会社代理店
有限会社ゼンポ　TEL 03-3865-3881
FAX 03-3865-2806
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10全国保育会館4階

無制限の動画や写真を通して、園と保護者の絆を深める連絡アプリ

全国私立保育連盟推奨（総代理店）

きっずノート

「きっずノート」は長く使い続けていただけるよう
初期費用0円・登録者数無制限

＼すべての機能使い放題／
月額5,500円（税込）～

無料体験実施中！

お申し込みはコチラ

ご相談・ご質問はお気軽に
きっずノートサポートセンター　TEL 03-3865-3886